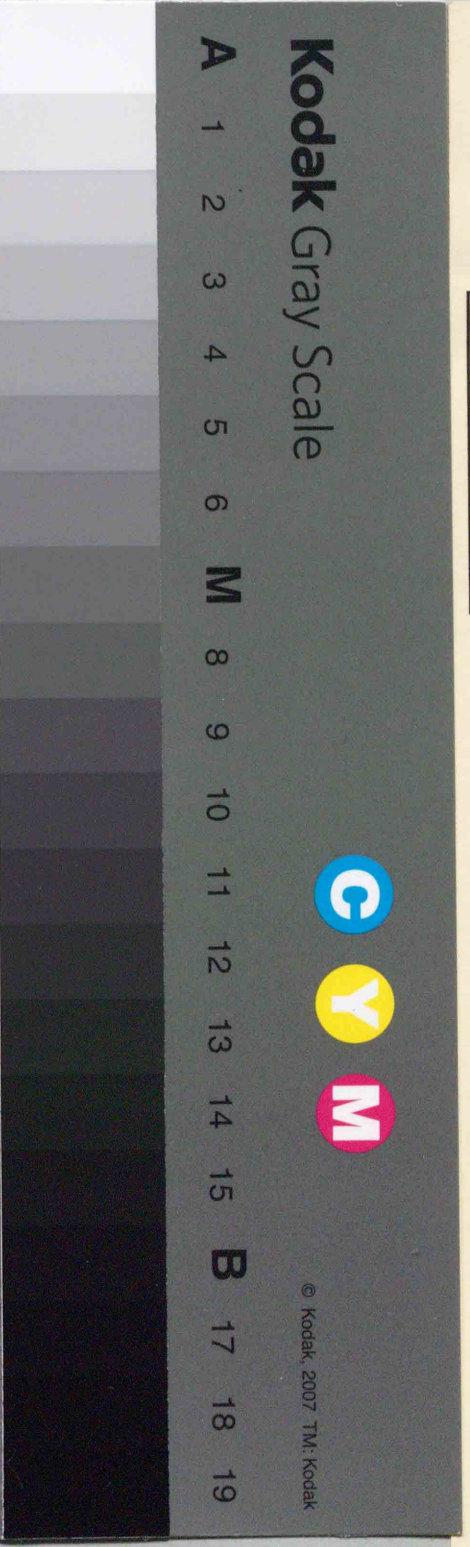
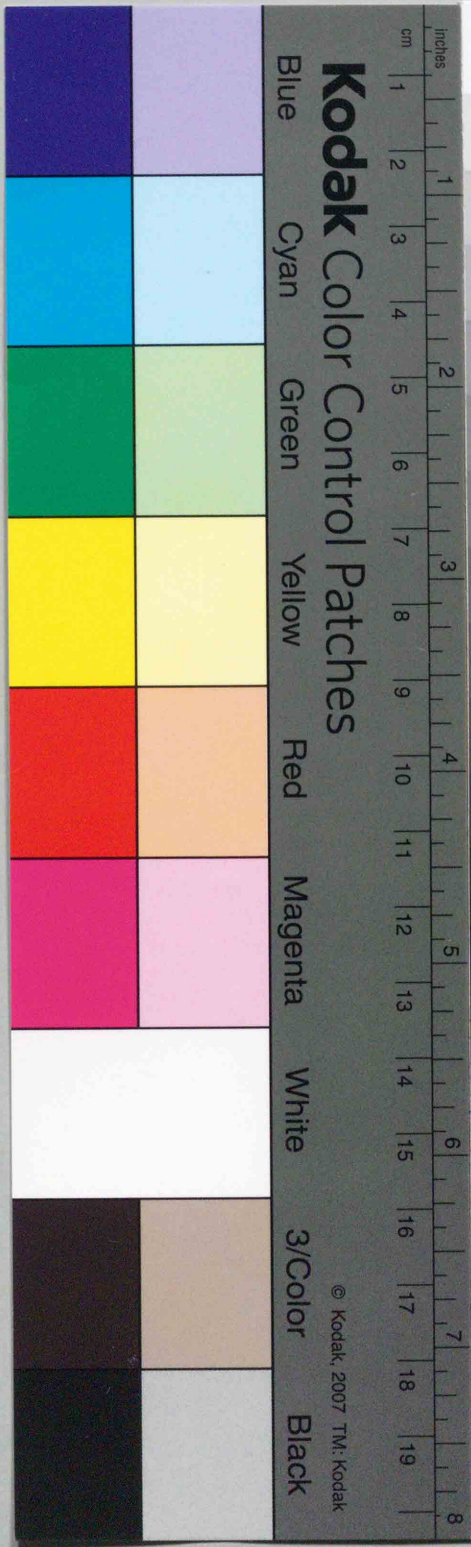


高等小學

國語讀本
二

375.9
N119
資料室



30480
教科書文庫

3
810
32-1901
20000
18062



資料室

3759
N119

明治三十四年九月十三日 文部省檢定濟

高等小學教科用兒童語

高等小學國語讀本

伯爵 伯爵 副島種臣 東久世通禧 西澤之助 編



東京 國光社藏版

高等小學國語讀本二

目次

第一課	大日本國	五
第二課	まごころ	七
第三課	藤原鎌足	九
第四課	學問	十三
第五課	秋の田	十四
第六課	種子	十六

高等小學國語讀本二

第七課 開墾

十九

第八課 世は相持

二十二

第九課 廣澤安任

二十四

第十課 運送

二十八

第十一課 港

三十一

第十二課 河村瑞軒

三十五

第十三課 智惠伊豆

三十八

第十四課 鑛物

四十

第十五課 佐藤信淵(一)

四十三

第十六課 佐藤信淵(二)

四十六

第十七課 旅行

四十九

第十八課 海防

五十一

第十九課 動物の自衛

五十四

第二十課 大砲

五十八

第二十一課 恤兵

六十一

第二十二課 軍旗

六十六

第二十三課 平壤の戦 六十八

第二十四課 有栖川宮 七十一

第二十五課 御國の民 七十五



高等小學國語讀本二

伯爵 東久世通禧 閱
伯爵 副嶋種臣 閱
西澤之助 編

第一課 大日本國

我が大日本國は、萬世一系の 天皇の知る
しめす御國なり。

歴代の 天皇、聖徳高くましく、て、深く、臣

民を惠ませ給ひ、又、臣民は、忠誠にして、事ある時は、義勇、公に奉じて、身を顧みざりき。されば、古來、曾、國威をおとし、ことなし。

四方は、皆、海にして、自然に、隣國と、境をへだてたり。氣候、溫和にして、南北兩端の地を除く外は、寒暑、共に甚しからず。頗、生活にかなへり。

國內、地味肥え、田園連りて、穀物、菜蔬ゆたかに、森林茂りて、良材多し。又、山よりは、金、銀、銅、鐵、石炭等を出だし、海よりは、魚介、海藻等を産す。

我等、此の國に生れたるは、實に、此の上もなき幸ならずや。

第二課 まごゝろ

すめら御國のもの、ふは
いかなることをつとむべき

たゞ身にもてるまごゝろを

君とおやとにつくすまで

我が國に生れたらんものは、たれも皆、この
心がけなかるべからず。

君を尊み奉り、おきてを守りて、常には、己が
業をよく勉め、事あらん時は、君の爲、國の爲
に、身をも顧みざるは、臣民たるものゝ道に
して、即、君に、まごゝろを盡すなり。

親を敬ひて、教に背くことなく、親の心を、心
として、身を立て、家を興すは、子たるものゝ
道にして、即、親に、まごゝろを盡すなり。

かく、君と親とに、ま心を盡して仕ふるは、人
の、人たる道にして、古の、孝子と謂はれ、忠臣
と稱へられし人々も、唯、此のまごゝろを盡
しゝなり。

第三課 藤原鎌足

藤原鎌足ハ、モトノ姓ヲ、中臣トイヒキ。ソノ
先祖天兒屋根命、天孫瓊々杵尊ヲタスケ
奉リシヨリ、子孫世々、朝廷ニ仕ヘ奉リテ、祭
政ヲツカサドリキ。

皇極天皇ノ御時、大臣蘇我蝦夷、私ノ振舞多
ク、其ノ子入鹿モ、亦、ホシイマ、ナリシカバ、
鎌足、皇室ノ御爲ニ、之ヲ除カントテ、ヒソ
カニ、中大兄皇子ト、心ヲ合セ、謀ヲメグラシ

テ、時ノ來ラシテ待チ居タリ。



タマノ、三韓ノ
使參リテ、貢物ヲ
奉ルコトアリケ
レバ、コノ機ヲ失
ハジトテ、蘇我倉
山田石川磨佐伯子磨等ト、手筈ヲ定メタリ。
此ノ日、天皇、大極殿ニ出御マシノケテ、入

鹿ハ、御前ニ侍セリ。石川磨、三韓ノ表文ヲ讀
 メルトキ、皇子等進ミ出デ、入鹿ヲ斬リ、又
 兵ヲ遣シテ、蝦夷ヲモ誅シ、遂ニ、蘇我氏ヲホ
 ロボシケリ。
 コレヨリ、鎌足、皇子ヲタスケテ、政ヲトレリ。
 後、皇子、御位ニ即キ給フ。天智天皇ト申シ
 奉ル、是ナリ。鎌足、内大臣ニ任ゼラレ、藤原ト
 イフ氏ヲ賜リ、其ノ子孫、永ク繁昌セリ。

第四課 學問

人は、生れながらに、萬事を知れるものにあ
 らず。皆、生れて後に、學びて覺ゆるなり。我等
 は、學校に入りてより、日々、教を受けて、既^スに、
 尋常小學校の教科を卒へ、今は、高等小學校
 に進みたり。此の間に、君を尊び、親に事へ、兄
 弟、朋友、親類に交る道をも、ほゞ學びて、
 有益なる智識を得たること少からず。

されども我等が學ぶべきことは、之に止らざれば、尚此の上にも、愈學問して、徳を修め、智を磨き、身を立て、家を興し、御國の爲に、力を盡さんことを心がくべきなり。

第五課 秋の田

秋風、身にしみて、草葉の露、漸しげく、野山の木々は、うすくこく染め出でたり。田の面の早稻は、すでに蒞り取られ、中稻も、はやみの

り、晩稻も、大方熟して、穂先、重げなり。農夫等の、春種をまき、夏の初、苗を植ゑつけ、てより、水にも、早にも、遇はず、案じたりし厄日も、無難に過ぎ、丹精せし、效も、顯れて、かく、



豊に熟したるを見るは、如何ばかり嬉し^{十六}か
らん。老いたるも、若きも、皆野に出で、蒞^{十六}
るもあり、干すもあり。此處には、人々の笑ひさ
ざめく聲聞え、彼處には、少女等の節おもし
ろく、歌をうたふもありて、いと楽しげなり。

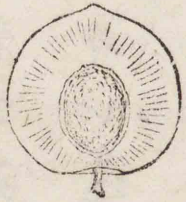
文法

漸豊に、皆いと愈遂に、即もし、かく頗實に
等ハ、動詞、形容詞、副詞ナドニ副ハル詞ナ
リ。之ヲ、副詞トイフ。

第六課 種子

草木ハ、多クハ、花ヲ開キ、實ヲ結ブ。

實ニハ、種子アリ。種子、地ニ落ツ
レバ、芽ヲ生ジ、成長シテ、一箇ノ
植物トナリ、サラニ、多クノ實ヲ



ムスブ。

種子ニハ、サマノ^ノ形アリ。米、麥ノ如キハ
細長ク、豌豆ノ如キハ圓シ。又、西瓜、南瓜ノ種
子ノ如ク、平タキモノアリ。

梅、桃等ハ、果實ノ中ニ、各一箇ノ種子アリ。又、
瓜、茄子ノ如ク、一箇ノ實ノ中ニ、無數ノ種子
アルモアリ。桑、松ノ如ク、無數ノ果實集リテ、
一團トナレルモアリ。

楓、^{カヘ}蒲公英、^ボ薊ノ如キハ、種子ニ、翼アレバ、風ニ
吹カレ、遠キ處ニ至リテ、蕃殖スルナリ。

ミイリノヨキ種子ハ、ヨク發生シ、ミイリ惡
シキ者ハ、芽ヲ生ゼザルコトアリ。サレバ、之

ヲマカンニハ、良キ者ヲ選ブコト肝要ナリ。

米、麥ナドノ種子ヲ選ブニハ、鹽水、又ハ、^{ニガ}苦鹽

ノ中ニ浸シテカキ廻スヲ、簡便ナリトス。サ

テ、ミイリ惡シキ者ハ浮ビ、ミイリヨキ者ハ

沈メバ、之ヲ見テ、良否ヲ別ツコトヲ得ベシ。

第七課 開墾

原野を拓きて、田畑となし、地味にかなへる
穀物、野菜、もしくは、桑、茶等を作り、牧畜に適

する地には、牛、馬、羊、豚等の類を飼ひて、蕃殖せしめば、大なる利益あらん。

我が國は、太古より、農業を重んじたれば、田園、多く開けたれども、東北の地方には、未墾の地、尚少からず。殊に、北海道の如きは、居民少くして、荒野多し。又、南方なる臺灣には、一年、數回の收穫ある稻田とするを得べき地にして、未、開拓せられざる處あり。

近時、開墾に従事するもの、漸多く、北海道移住者の如きは、年々に増加せり。

また、太平洋をへだてたる墨^メ其^キ西^シ哥^ゴ、及、秘^ペ露^ル等には、沃野、千里連り

たれば、我が國民の、こゝに到りて、開墾を事



とする者も少からず。

第八課 世は相持

昔、或人が航海した時、暴風にであつて、船は破れ、乗組の人は、皆死んで、獨、何處ともわからぬ離嶋にたゞよひ着きました。

あたりを見るに、住む人もなければ、救を求むることもできません。水を飲まうとしても、井戸がないので、泉を求めて、辛うじて、渴

をうるほし、食物がほしいと思つても、賣る者もないので、木の實をひろひ、魚鳥をとらへては、飢をしのぎ、巖のかげや、木のうつろを宿として、雨露を凌ぐなど、一方ならぬ不自由をしたといふ事でございます。

すべて、世の中に、一人では、完全な生活をとげる事はできません。家族、親族、同郷の者、又は、同國の者が、互に助けあはねばならぬも

のでございます。して見れば、人は、自分一人の利益ばかりを圖ることなく、衆人、皆、共同する心得をもたねばなりません。それ故、諺にも、世は相持といふことがあるのでございます。

第九課 廣澤安任

廣澤安任ヤスガラハ、通稱ヲ、富次郎トイヘリ。家、世々、會津エヒツノ老臣タリ。明治ノ初、會津藩主、封ヲ、斗南ナムニ移サル。斗南ハ、陸奥ノ東北ニアリテ、氣候寒ク、住民少ク、原野ハ、遠ク連レドモ、草深クシテ、地荒レタリキ。

安任、藩主ニ隨ヒテ、コ、ニ移リ、奮ヒテ、開墾ノ業ヲ起サントシ、先、北郡ノ谷地頭ヤチガシラトイフ原ヲ選ビテ、牧畜ヲ企テタリ。

コノ頃、我が國ニテハ、牧畜ノ業、未盛ナラズシテ、則ルベキ方法ナカリシカバ、百事、皆、自

工夫ヲコラサ
ルヲ得ザリキ。
初、安任ノ所有セ
ル牛馬ハ、數頭ニ
過ギズ、牧場モ、亦
廣カラザリシニ、
夏ハ、野ニ放チ、冬
ハ、舍内ニ飼ヒ、自



草ヲ蒔リ、水ヲ與ヘテ、起臥ヲ共ニシ、熱心ニ、
業ヲ勵ミシカバ、次第ニ、盛大ニ赴キテ、僅ニ、
十年ニシテ、牛馬ノ數、三百頭、牧場ノ廣サ、二
千三百町ニ餘ルニ至リ、尚、其ノ他ニ、六十町
ノ畠地ヲ得、百餘町ノ森林ヲモ造レリ。
此ノ後、安任ニナラヒテ移住スル者、年々ニ
加リ、終ニハ、大ナル村落トナリシカバ、安任、
學校ヲ建テ、子弟ノ教育ヲ圖レリ。

明治九年、東北御巡幸ノ時、陛下、親シク、安任ヲ、御前ニ召シ出デ、牧畜ノ景況ヲ下問セサセ給ヒ、ソノ牛馬ヲモ御覽ゼラレテ、功勞ヲ賞シ給ヘリ。是ヨリ、安任ノ名、天下ニ高シ。

第十課 運送

拝啓御存トの通り當地方は水陸の産物に富み候へども此等を運送するに人馬小舟の力のみをかり居り候ては到着もおく札賃錢も相かさみ候により折角の産物も打捨置く有様なるは如何にも残念に存せられ候されば今後汽船の航路をひらき申したきは當地一般の希望に候間御迷惑ながら何會社へなりとも御相談下され此の儀成立ち候様御盡力に預りたく當地方物産一覽表相添へ願上げ候先は右御依頼申上

げたくかくの如くに御座候勿々

返事

御来諭敬承仕り候御地方は實に山林に富み原野も廣く且海にも接し居り候へば運送の便開け候はんには農工の産物もふえ材木薪炭類の賣捌も宜しく従て商業も繁昌し尚水産物をも賣出され候て自然御地方の富を増すべき事と存居り候事故早速

奔走仕り回漕の便利相開け候様及ばずながら盡力致すべく候委細は追て申上ぐべく候取急ぎ御返事のみ申上げ候拜復

文法 原野も廣く、且、海にも接し居候へばトイフトキノ且ハ、上下ノ語句ヲ接續セリ。之ヲ、接續詞トイフ。

第十一課 港

わが國は、東南に、太平洋を控へ、西北に、日本海を擁し、南は、臺灣より、北は、千嶋に至るま

で、海岸に、屈曲多くして、天然の良港に富めり。横濱は、東京灣の内にありて、我が國第一の開港なり。港内廣くして、船を繋ぐに宜し。支那海と太平洋との間を通航する船は、概、こゝに寄港するが故に、船



船の出入、絶ゆることなく、貿易、甚盛なり。横濱より、西に向ひて、海上をはすること、一晝夜にして、神戸カウベに達す。その繁盛、横濱に次ぐ。こゝより、瀬戸内海を経て、馬關を過ぎ、遠く、九州の西に出でなば、我が國最古の貿易場たる長崎に到るべし。こゝも、亦、繁盛なる港なり。長崎より、南に進まば、琉球を経て、臺灣に達

すべし。こゝには、基隆キールン、淡水タン、安平スイアン、打狗等ピンタカオの港ありて、支那との貿易盛なり。

長崎より、日本海を、北に廻れば、信濃川シナノの河口に、新潟ニヒガタあり。北陸道の物産のあつまる處なり。又、津輕ツガル海峽に入れば、渡嶋フシマ灣内に、函館あり。北海道海産物の市場なり。兩港共に、著名なる開港にして、露領の浦鹽ウラジオス斯德港トツクに近ければ、他日、貿易愈、隆盛に赴くなるべし。

第十二課 河村瑞軒

昔、寛文中、出羽ヨリ、馬關ヲ廻リ、瀬戸内海ヲ過ギテ、江戸ニ達スル、八百餘里ノ航路ト、陸奥ヨリ、東海ヲ經テ、江戸ニ達スル、凡百五十里ノ航路トヲ開キテ、海運ノ便利ヲ得シメシハ、河村瑞軒ナリ。

瑞軒ハ、才智人ニスグレ、シバシバ、常人ノ考へ及バザルコトヲ案出シテ、世ヲ驚カセリ。

嘗、或大寺ノ本堂ノ棟瓦、一枚落ちタリケレバ、寺僧之ヲツクロハントテ、其ノ費用ヲ、人ニ見積ラシメシニ、足代、及、人夫ノ費オビタダシカリシ故、當惑シテ止メントセシヲ、瑞軒ハ、其ノ半費ニテ、ツクロハントヲ請負ヘリ。人々、之ヲ怪ミケルニ、瑞軒ハ、一ノ大風呂ヲ造リ、本堂ノ前ニテ、之ヲ高クアゲ、棟ヲ越エシメテ、後ニ落シ、糸ヲ屋根ニ跨ラシメタ

リ。サテ、糸ノ一方ノ端ニ、細繩ヲツナギテ、他ノ一方ヨリ、タグラセ、次第ニ、太キ繩ヲツナギ、ツヒニ、二本ノ大繩ヲウチカケテ、丈夫ナル繩梯子ヲ作り、コレヨリ、左官ヲ、棟ニ昇ラセテ、損所ヲツクロハシメタリ。之ヲ見ルモノ、驚カザルハナカリキトイフ。

第十三課 智恵伊豆

伊豆守松平信綱は、徳川家光の臣にて、才智

勝れたりければ、智惠伊豆と稱せられき。
 かつて、江戸城内に、大石ありしを、取り除か
 んとて、人々、さまざまに、評議せしかど、よき
 工夫なかりけるに、信綱、之を見て、地を堀ら
 しめて、容易に、其の石を埋めしめたり。
 又、ある時、唐金の水溜ミツヅメの、高さ四尺ばかりな
 るものを、數多造らしめんとて、鑄物師に命
 じたりしに、鑄物師、不當の價を求めしかば、

信綱きゝて、價は、造りをへて後、目方をはか
 りて定めん。今一つ、數をまして造るべしと
 いへり。

かくて、水溜成れるに、人々、かゝる重きもの
 をはかるべき天秤をければ、如何にすべき
 とて、信綱に申し出でしに、信綱、すなはち、か
 の一つの水溜をうち碎きて、目方をはかり、
 其の地金の價に、手間賃を加へて、價を定め

たりきといふ。

第十四課 鑛物

工業ノ發達スルニ從ヒテ、之ニ要スル原料、益多クナレリ。殊ニ、鑛物中ニテ、多ク用ヰルハ鐵、石炭、粘土、石材、金、銀、銅等ナリ。

鐵ハ、岩手縣、嶋根縣等ヨリ、多ク產出ス。鐵道ヲ敷キ、鐵橋ヲ架シ、鐵艦ヲ造リ、銃砲ヲ製シ、機械、刀劍、庖丁、鐵瓶、鍋、釜等ヲ製スルニ缺ク

ベカラザルモノナリ。

銅ハ、足尾、尾去澤、阿仁等ノ鑛山ヨリ、多ク產ス。コレハ、種々ノ器具ヲ製シ、マタ、針金ニモツクルナリ。

蒸氣機械ヲ運轉シ、若クハ、銅、鐵等ヲ製スルニハ、石炭ノ火力ニヨル。石炭ハ、多ク、九州、北海道等ヨリ產シ、工業ノ進歩ヲ助クルコト頗大ナリ。

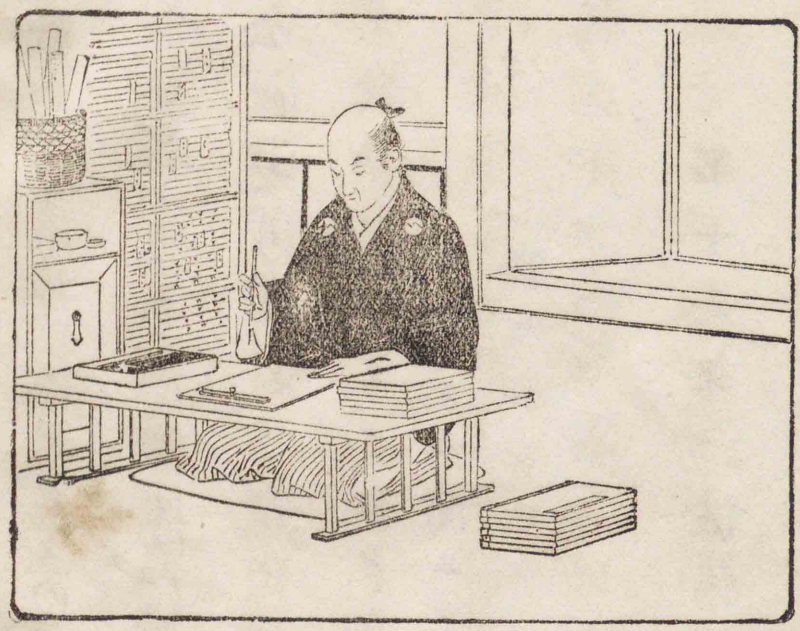
佐渡、生野等ヨリハ、金ヲ産シ、院内、半田等ヨ
 リハ、銀ヲ産ス。之ヲ用キテ、貨幣ヲ製シ、裝飾
 品ヲ作ル。又、長石、粘土ニテハ、陶磁器ヲ製シ、
 煉瓦ヲ作ル。御影石、大理石等ハ、壯麗ナル建
 築ニ用キ、又ハ、彫刻物ヲ造ル用ニ供ス。
 鑛物ノ、人生ニ必要ナルコト、カクノ如シ。之
 ヲ産スル山ヲ、鑛山トイヒ、之ヲ採ル業ヲ、鑛
 業トイフ。

第十五課 佐藤信淵(二)

佐藤信淵は、出羽の人にて、世々、醫を業とし
 たり。高祖父歡庵、飢饉にて、人の餓死するも
 の多きを憂へ、救ふべき道を求めんとて、諸
 國をめぐり、農業に關することを究めて、人
 人にも、その方法を授けり。
 祖父、不昧軒、最、鑛業の事にくはしくして、山
 相秘録といふ書を著しき。この書は、山の形、

土石の色等を見て、金、銀、銅、鐵、玉、石などの量を見分け、且、鑛脈の淺深をも知るべき方法を記せるものなり。此の後、鑛業に従事する者之によりて、あらかじめ、採掘の難易、費用の多少等を知るを得たり。

信淵、年十三のとき、父に従ひて、蝦夷に入り、其の地味、物産、氣候等を調査し、後、陸奥、出羽を巡りて、風土、物産を研究し、下野の足尾銅



山に到りて、銅鑛を分析する法を、父に學べり。是より、諸國を巡りて、しきりに、農事を勧め、家居の暇もなかりしかど、尚、常に、筆をとりにて、父祖の教を書きあつめけり。

歡庵より、殆二百年の間、父子五代、相つぎて
研究せしを、信淵、遂に、これを大成して、世に
公にせり。

文法 は、に、を、て、の、ども、より、及、ぞ、や、か、こ、を、等、ハ、

言語ノ中間ニアリテ、上下ノ語ヲ接續關

聯セシム。之ヲ、て、に、を、は、又、ハ、助辭トイ

フ。

第十六課 佐藤信淵(三)

信淵、又、父の志を承けて、國學を修め、後、蘭學

をも究め、天文、地理、測量、兵學等に至るまで、
一として、通ぜざるはなかりき。

其の頃、外國軍艦、我が近海をうかひ、商船
も、來りて、貿易を求めしかば、信淵、海防の策
を講じて、世に示せり。

信淵、尚、開墾、牧畜、鹽田等の法を究め、且、最、經
濟の道にくはしかりき。其の説に曰はく、國
を富さんには、海外との貿易を盛にするこ

と、必要なり。貿易は、出貿易をよしとす。出貿易とは、我が國の人、我が船にて、國産を、外國に輸出して賣り捌くをいふ。かくせば、利益多くして、且、外國の事情を知るに、甚便利ならんといへり。

當時は、世人、之を信ぜざりしかど、數十年を経て、其の言の、理あるを知るに至れり。信淵の卓見、人にすぐれしこと、かくの如し。

第十七課 旅行

旅行して、他郷に遊び、名勝の地に到り、或は、山水の美しき境にのぞまば、自然に、高尚の心起りて、徳を進め、智を廣むる助ともなるべし。

又、見なれぬ山川の有様を觀て、目を悦ばしめ、里人にあひて、風土を問ひなどし、或は、奥ふかき山中にわけ入りて、清く靜なる處に

到らば、心留りて、歸ることを忘れぬべし。
或は、海ばた、山遠くして、眼界ひろき眺などは、王侯の富にも優れり。又、その里におひ出でたる名産の、異なる品を見、味を試むるも珍しかるべし。

すべて、勝地にあそびてみきゝすることは、只、その一時、耳目を悦ばしむるのみならず、幾年経とも、其の時の有様思ひ出でられて、

樂しかるべきなり。

藥訓參照



第十八課 海防

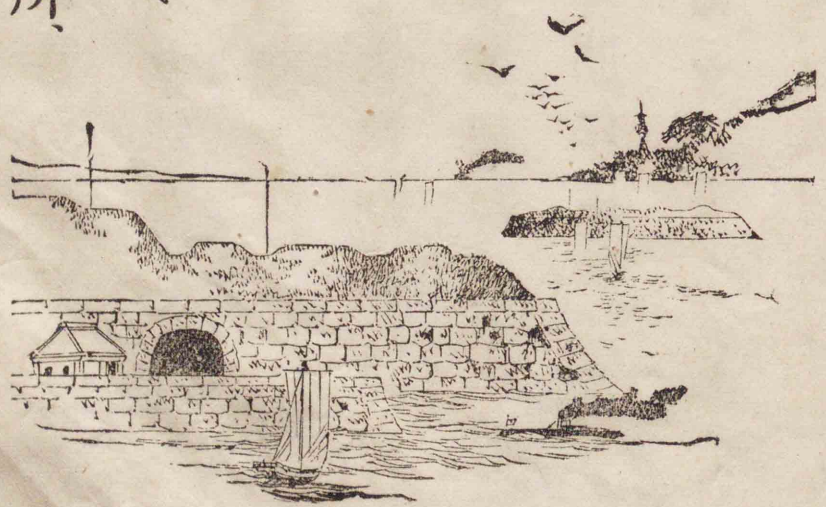
我が大日本ハ、海國ナレバ、海軍ヲ備へ、砲臺ヲ築キテ、四境ヲマモラザルベカラズ。

現今、海防區域ヲ定メテ、五區ニ分テリ。第一海軍區ハ、北ハ、陸中ヨリ、南、紀伊ニ至ル迄ノ海岸、海面、及、小笠原嶋等ニシテ、横須賀軍港ニ、鎮守府ヲ置キテ、之ヲマモレリ。

第二海軍區ハ東、紀伊ヨリ、西、日向ニ到リ、北
 長門ニ到ル迄ノ海岸、海面、并ニ、内海等ニシ
 テ、吳軍港ニ、鎮守府ヲ置キテ、之ヲ守ル。第三
 海軍區ハ、九州ノ西海岸、及、壹岐、對馬、沖繩ノ
 海岸、海面等ニシテ、佐世保軍港ニ、鎮守府ア
 リテ、之ヲ管ス。

石見ヨリ、羽後ニ至ルマデノ海岸、海面ヲ、第
 四海軍區トシ、舞鶴ヲ、軍港ト定メ、陸奥、并ニ、

北海道ノ海岸、海面ヲ、第
 五海軍區トシ、假ニ、室蘭
 ヲ、軍港ト定ム。コノ二軍
 港ハ、備、未成ラザルヲ以
 テ、横須賀、吳ノ兩鎮守府
 ニテ、ソノ區ヲ分チ管ス。
 鎮守府ニテハ、艦隊ヲ備ヘ
 テ、各、海軍區ヲ守リ、造船所、



及、船渠等ヲ設ケテ、軍艦ノ製造、修繕ニ備フ。
又、海兵團ヲ置キテ、水兵ヲ教練セリ。

第十九課 動物の自衛

菜の花にすむ蝶は、黄色で、大根の花にすむのは白うございます。それ故、他の物が捕らうとすれば、花の間に匿れてのがれることができるのでございます。



烏賊は、敵に逢へば、墨汁を吐き、水を濁して、難をのがれ、鹿、牛などの獣は、角で、敵を防ぎ、虎、猫などは、牙と爪とを武器とし、猪は、牙、鷹、鷹等の鳥類は、嘴と爪、雞は、けづめを、武器としておます。
又、雁、鴨の如きものは、隊伍をくんで往來し、眠る間にも、軍隊の哨兵の如く、見張を置きます。



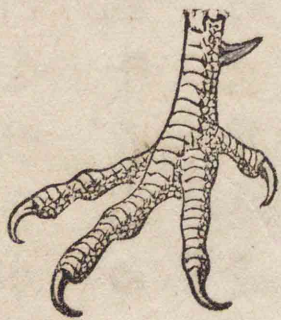


此の様に、すべての動物には、皆、自然に、身を衛る備がついて居ります。

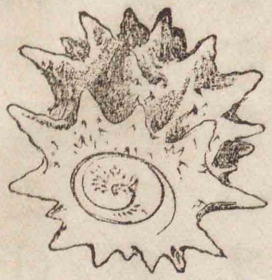
これについて、をかしい話があります。榮螺サビエ

が、殻や蓋の丈夫なのをたのみにして、世に、恐しい者はないといつて、魚どもにほこつて居りました。

ある日、さつと、音がして、水上から、網が下りて來たので、鯛や平



目などは、驚いて逃げましたが、榮螺は、こゝぞと、堅く、蓋をとち、平氣になつて居て、鯛、平目などのあわてるのを笑つておました。しばらくたつて、榮螺は、自分の殻が、暖になつてきたので、ふしぎに思つて、そつと、蓋を



あけて見ると、こはそもいかに、はや、火の上へのせられて、やかれておるのでございました。

何でも自分ばかりをたのみにして、他のことを知らない、この榮螺の様なめにあふでございませう。

第二十課 大砲

現今、兵器ノ中ニテ、最勝レタルハ、大砲ナリ。一發ニシテ、軍艦ヲモ撃チ沈ムベク、砲臺ヲモ破ルベク、又、一時ニ、數十百人ノ生命ヲモ奪フベシ。

陸上ニテ用キル大砲ハ、之ヲ大別シテ、山砲、野砲、攻城砲、及、海岸砲ノ四種トス。

山砲ハ、最輕ク、馬ナドノ力ヲ借ラズシテモ運ブヲ得ベシ。山地ノ戰ニ、之ヲ用キル。

野砲ハ、山砲ニ比スレバ、重キ故ニ、馬ニ牽カセテ、野戰ニ用キル。ソノ彈丸ハ、山砲ヨリモ、遙ニ遠キニ達スベシ。

攻城砲ハ、市街ヲ圍ミ、或ハ、城砦ヲコボタン

海軍、學國語讀本二

トスルニ用キルモノニテ、山砲、野砲ニクラ
ブレバ、甚大ニシテ重キモノナリ。
海岸ノ要地ニ備フルヲ、海岸砲トイフ。ソノ
大ナルモノ、彈丸ハ、一カ、ヘニモ餘リ、直
立セシムレバ、高サ、人ノ身ノ丈ホドアリテ、
重量ハ、馬三匹ヲ合セタル程ナリ。コレヲ發
射スベキ砲身ノ、巨大ナルコトオモヒ知ル
ベシ。

軍艦ニ備フル大砲ニモ、亦種々アリ。其ノ中、
速射砲ト稱スルモノニハ、一分時間ニ、三十
回發射シ得ベキモノアリ。又、機砲ニハ、一分
時間ニ、一千發ヲ放ツヲ得ベキモノモアル
ナリ。

文法 うへなるかなノかなハ、感歎ノ詞ナリ。語
句ノ首ニ用キルあゝ、いかに、いざ、すはナ
ドモ、コレヲト同ジク、感動詞トイフ。

第二十一課 恤兵

海軍、學國語讀本二

國を護るは、軍人の任にして、その勞苦をなぐさめて、勇氣を勵すは、國民の務なり。

征清戰役の時、將士、敵地の寒暑にさらさるること、殆、一年に及べり。其の間、政府よりの給與なきにあらざりしかど、氣候、風土の異なる敵地なれば、何事も不自由にして、わけて、日常用品の缺乏甚しきことありき。

大元帥陛下には、廣嶋の大本營におはしま

して、遠く、外征將

士の艱難をおぼ

しやらせ給ひ、屢

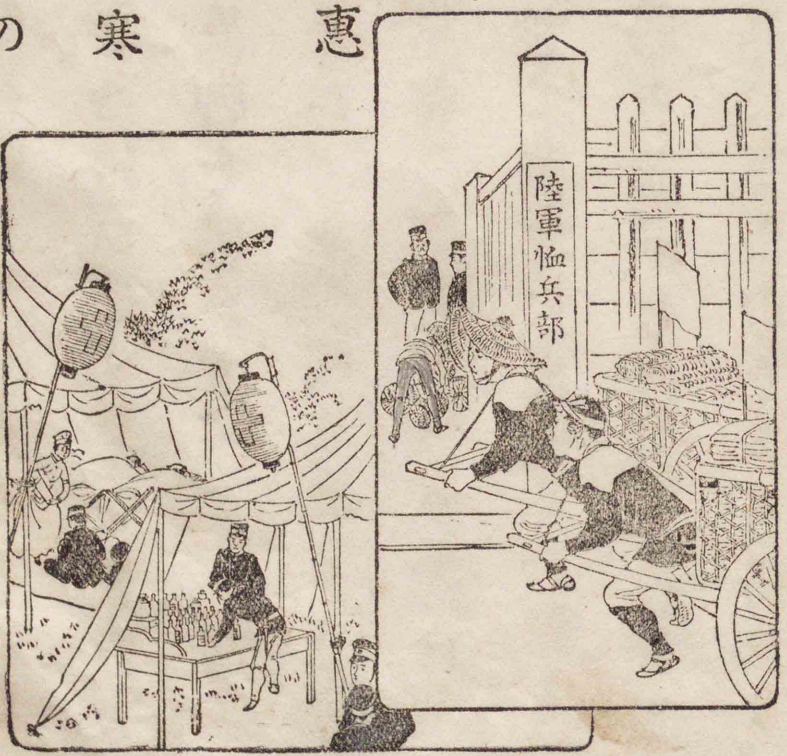
詔を下し給ひて、

種々の用品をも惠

ませ給へり。

皇后陛下も、亦、防寒

の具として、真綿の



類を下し賜ひ、負傷者の爲には、みづづから、
繻帶を製して惠ませ給ひ、又、手足を失ひた
るものには、義手、義脚を賜ひき。

國民も、また、相きをひて、金圓、物品等を、軍隊
に贈りければ、陸軍省、海軍省の恤兵部は、一
一、これを取り次ぎて、戦地に送れり。

かくて、軍隊は、恩賜の物品、并に、國民の寄贈
物によりて、日用品に、不自由なきを得たり。

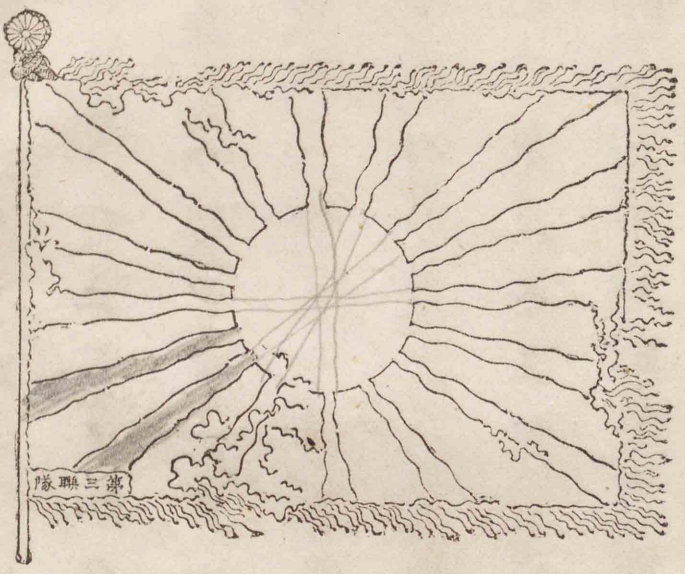
兵士等の悦、如何ばかりなりけん。

又、日本赤十字社にては、數多の醫員、看護員
等を戦地に送り、内地の衛戍病院にも、醫員、
看護婦等を出して、多くの傷病兵を救護せ
り。この日本赤十字社は、皇室の御庇護を
受け、有志者の協力によりて組織せるもの
にて、平時に、準備を整へ、戦時には、敵味方の
別なく、傷病者を救護するを、主旨とせり。

第二十二課 軍旗

軍旗ハ、又、聯隊旗トモイフ。聯隊ノ成レル時、大元帥陛下ノ下シ賜フモノナリ。軍旗ノ向フトコロハ、即、陛下ノ大命ノ存スル所ナレバ、我が軍人タランモノハ、如何ナル危険ヲ冒ストモ、身ヲ顧ミズシテ進ムベシ。又、コノ軍旗ノ立ツ處ハ、假令、敵地ナリトモ、御國ノ領土ニ等シキガ故ニ、如何ナル

困苦ニアフトモ、之ヲ護リテ、一步モ退クコ



トナカルベシ。シバ、戰場ニ臨ミテ、風ニサラサレ、雨ニヌレ、彈丸ノ痕サヘ殘リテ、イト古ビタル軍旗ハ、勳功ノ多カリシコトヲ顯セルモノニ

テ、最、名譽アルモノナリ。我が國ノ軍旗ニハ、
征清ノ役ニ、霰ノ如ク降り來ル彈丸ノ中ニ
立チテ、裂ケ破レタルモノモアリ。

軍旗ニ對シテハ、軍人ノミナラズ、國民一般
モ、敬意ヲ表スベキナリ。

第二十三課 平壤の戦

明治二十七年七月、日清の平和破れし時、わ
が軍、先、成歡セイクワン牙山ガサンの敵を破り、轉じて、平壤ヘイジョウに

向へり。

平壤は、朝鮮國の北部にありて、前には、大同
江の流を控へ、後には、牡丹臺の險を負へる、
天然の要害なり。二萬の清兵、これに據り、あ
またの砲壘を築き、兵器、金穀を、多く貯へて、
備を嚴にせり。

我が軍、合撃のはかりごとを定めて、道を分
ちて進み、九月十五日の未明には、諸道の軍

隊、悉、平壤に達し、四面より、齊しく攻めかけたり。その一隊、雨と降り来る弾丸を冒して進撃せるを、敵は、全力を集め、必死となりて防戦せしに、他の一隊は、



はやく、牡丹臺にせまりて、遂に、之をのつとれり。

翌十六日の曉、我が軍、競ひ進みて、遂に、平壤を陥れぬ。日章の御旗、高く、城頭にひるがり、朝日に輝きて、勇しき有様なりき。

第二十四課 有栖川宮

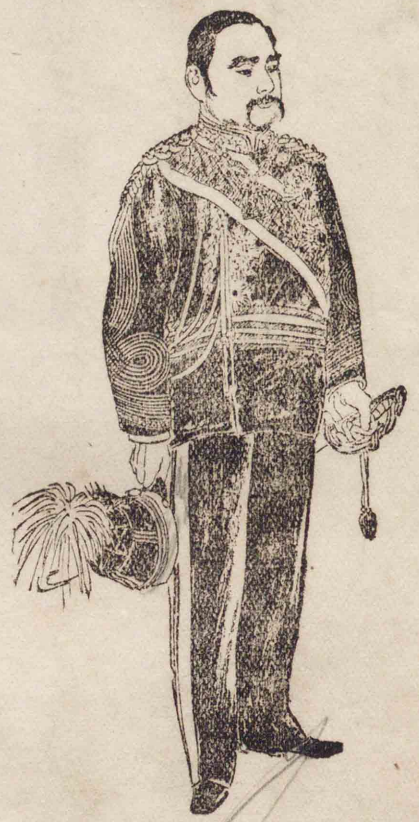
征清の役に當り、大元帥陛下をたすけ奉りて、最大功あらせられしは、參謀總長有栖

川宮熾仁親王カミヤ ヒロト殿下なり。

親王、徳望、殊に高くましく、つとに、力を、
國事に盡し給ひ、明治の初、征東大總督とな
り、官軍を率ゐて、江戸に下り、朝敵をたひら
げ給ひき。

明治十年、西南の役に、再、征討總督となりて、
九州に下り、殆一年の間、戰陣の苦をかさね
給ひ、亂を平げて凱旋し給ひき。

ついで、陸軍大將に任ぜられ、左大臣となり、



近衛都督、參謀
總長、神宮祭主
等に補せられ
たまへり。

明治二十七年の夏、陛下に従ひて、廣嶋に
到り、翌年一月、疾にかゝり給ひながら、し
ひて、劇務に當らせ給ひしに、その二十四日、

遂に薨じ給へり。時に、御年、六十一。
陛下、いたく悼ませ給ひ、國葬の禮を以て、厚
く葬らしめ給ひき。

親王、御性、寛仁にまし／＼て、威儀正しく、國
事に盡したまふこと、數十年、一日の如くお
はしましき。實に、國家の柱石とも申し奉る
べし。

文法 征清、役、大功ハ、名詞、の、にハ、て、に、を、は、當り、

たすけハ、動詞、最ハ、副詞、られしハ、助動詞、
高きハ、形容詞、ついでハ、接續詞ナリ。

第二十五課 御國の民

(一)

御國の民よ わがはらからよ

國の爲つくせ 君のためつくせ

家のため身の爲 つくせよつくせ

矢玉ふるなかも おそれずすゝめ

太刀うつ下も ひるまらずすゝめ

旭のはたの　　ひるがへる處は
これ我が國ぞ　　みなわが國ぞ

(三)

御國の民よ　　わがはらからよ
つゝの音ひゞき　　ときの聲きこゆ
君の爲こゝろを　　つくせよつくせ
かばねつむ山も　　ふみこえすゝめ
らしほの川も　　をどりてすゝめ

旭の旗の　　ひるがへる處は
これ我が國ぞ　　みなわが國ぞ

(三)

御國の民よ　　わがはらからよ
暴風ふきまきて　　敵の旗なびく
國の爲わが身を　　つくせよつくせ
こほりたる海も　　いさまきわたり
沙漠の中も　　いとはずすゝめ

第壹卷

卷一

熊

氏